第２章３節

看護師国家試験必修問題の出題内容・形式の分析および評価と作問への提言

～ 問題分析とフォーカスグループインタビュー調査を通して ～

日本赤十字看護大学　佐々木 幾美
放送大学大学院　山内 豊明
横浜市立大学　赤瀬 智子
山形大学　布施 淳子
日本赤十字看護大学　篠原 真里
日本赤十字看護大学　川端 龍人

研究要旨

本分担班は、過去３年間の看護師国家試験の必修と思われる問題（以下、必修問題）の内容の適切性、習熟度や問題構成、出題形式等の妥当性について、看護師学校養成所にて教育に携わる教員を対象にフォーカスグループインタビューを行い、出題内容・形式の分析および評価を行った。それにより、看護師国家試験における新たな出題方法や形式、出題内容に関する課題を明らかにすることを目的とした。採点除外となった 11 問を除いた 139 問を分析した結果、改善により良問となり得る問題の割合は 31 問（22.3%）であり、その理由として、難易度に課題がある（簡単すぎる）問題が多い傾向にあった。フォーカスグループインタビューから、「出題の意図が明確で、問われている内容について多様な解釈を許さないこと」、「臨床において必要な知識を問うものであり、実際に活用可能な内容を扱っていること」、「看護基礎教育のどの教育機関でも教授している内容であること」が良問となる条件として重要であることが明らかにされた。

１．研究目的

本分担班は、過去３年間の看護師国家試験のうち、市販の問題集をもとに必修と思われる問題（以下、必修問題）の内容の適切性、習熟度や問題構成、出題形式等の妥当性について、看護師学校養成所にて教育に携わる教員を対象にフォーカスグループインタビューを行い、出題内容・形式の分析および評価を行った。それにより、看護師国家試験における新たな出題方法や形式、出題内容に関する課題を明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

１）問題分析

はじめに、過去 3 年間の看護師国家試験の必修問題全 150 問の中から、採点除外となった 11 問を除いた 139 問を対象に、正解率、識別指数をもとに「良問」あるいは「改善により良問となり得る問題（以下、改善問題）」を、24 問抽出した。抽出基準は出題の意図の明確さ、難易度の適切さ、正答肢の根拠、誤答肢の根拠などである。4 名の研究者がそれぞれ良問、改善問題を選択した後、その結果を協議し、良問 9 問、改善問題 15 問を抽出した。

２）フォーカスグループインタビュー

(1)対象

全国の看護師学校養成所の施設リストの中から各教育課程（看護師養成所（3 年課程・2 年課程）、5 年一貫教育課程、看護短期大学、看護系大学）に所属する教員をリクルート対象とした。教育課程ごとの施設リストは厚生労働省の協力を得て作成した。学校のリストから、インタビュー実施場所との距離（片道約 2 時間まで）を勘案して各教育課程で 4 校ずつ抽出

し、看護師学校養成所の長（学部長もしくは学科長、学校長、教務部長、教務主任）に研究協力の依頼し、教員 1 名の紹介を依頼した。承諾が得られた施設の教員に対して、研究参加者連絡先返信用紙）・研究参加依頼説明書）・同意書 2 部・同意撤回書 2 部・インタビューガイド・インタビューで検討予定の問題一覧を渡してもらい、その教員が協力可能と判断した場合は氏名や連絡先を研究分担者へ返信するよう依頼した。協力の申し出があった教員に対して、複数のインタビュー開催日を事前に挙げ、参加可能な日を調整した。

(2)データ収集方法

参加意思を示した研究対象者に対し、フォーカスグループインタビューで検討予定の8問とインタビューガイドを予め送付し、事前に内容を検討し、職場同僚の意見も尋ねておくよう依頼した。

抽出した 24 問について、フォーカスグループインタビューで意見を収集した。

フォーカスグループインタビューは、1 グループあたり 1 名から 2 名の研究協力者がファシリテータとなり、インタビューガイドに則って各試験問題（設問）についてインタビューを行った。1 グループあたり、8問について尋ねた。インタビュー内容は以下の通りであった。

①出題の意図は明確か

②難易度は適切か

③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か

④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか

⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか

⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか

参加者は 11 名であった。

(3)分析方法

インタビューの内容は録音ならびに筆記で記録し、録音データのテープ起こし内容と筆記録をデータとして、質的記述的に内容分析を行った。

分析シートを用いて、インタビューの内容を分類し整理した。

(4)倫理的配慮

本研究の実施に際しては、事前に聖路加国際大学研究倫理審査委員会、および日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会により、本研究計画書の承認を得て実施した（承認番号：19-A030 および 2019-059）。

インタビュー調査の実施にあたり、必ず研究の目的・意義、方法、協力依頼内容を記載した文書とインタビュー当日の口頭説明による同意を得たのちに実施した。研究の研究参加依頼説明書には①研究協力は自由意思であること、②研究協力の諾否が今後の仕事に影響しないこと、③個人情報に関する保護を厳重に行うこと等を記載した。個人を特定できる情報を匿名化しデータについてはパスワードを設定して保管をした。同意撤回を希望する場合には、同意撤回書に署名し、研究分担者に送付することによりいつでも同意撤回が可能であることを説明した。ただし、同意を撤回した時点で、既に研究成果が学会等で公表されていた場合や、匿名化され個人が特定できない状態等の場合には、データを破棄できないこともあることを説明した。

３．研究結果

１）問題分析

① 分析した問題の総数と抽出した問題リスト

分析した問題は、過去 3 年間の看護師国家試験の必修問題 150 問の中から、採点除外となった 11 問を除いた 139 問であった。また、そこから「良問」9 問、「改善問題」15 問、合計 24 問抽出した。その一覧を表 1 に示す。

表1　抽出した問題一覧

看護師国家試験問題番号	「良問」「改善問題」の別	設問文
第106回 午前 6	良問	標準的な発育をしている乳児の体重が出産時の体重の約2倍になる時期はどれか。
第106回 午前 12	改善問題	喀血が起こる出血部位で正しいものはどれか。
第106回 午前 19	改善問題	足浴の効果で最も期待されるのはどれか。
第106回 午前 20	改善問題	療養施設、社会福祉施設等が集合して設置されている地域の昼間の騒音について、環境基本法に基づく環境基準で定められているのはどれか。
第106回 午前 23	良問	成人患者の気管内の一時的吸引における吸引圧で正しいのはどれか。
第106回 午後 6	改善問題	肺サーファクタントの分泌によって胎児の肺機能が成熟する時期はどれか。
第106回 午後 8	改善問題	基礎代謝量が最も多い時期はどれか。
第106回 午後 10	改善問題	病床数300床以上の医療機関で活躍する感染制御チームで適切なのはどれか。
第106回 午後 23	改善問題	水枕の作り方で適切なのはどれか。
第107回 午前 3	良問	シックハウス症候群に関係する物質はどれか。
第107回 午前 13	改善問題	関節や神経叢の周辺に限局して起こる感覚障害の原因はどれか。
第107回 午前 16	改善問題	排便を促す目的のために浣腸液として使用されるのはどれか。
第107回 午前 17	良問	他の医薬品と区別して貯蔵し、鍵をかけた堅固な設備内に保管することが法律で定められているのはどれか。
第107回 午前 19	改善問題	異常な呼吸音のうち高調性連続性副雑音はどれか。
第107回 午前 21	改善問題	経腸栄養剤の副作用（有害事象）はどれか。
第107回 午後 10	良問	股関節の運動を図に示す。内転はどれか。
第107回 午後 16	改善問題	インドメタシン内服薬の禁忌はどれか。
第108回 午前 8	良問	母乳中に含まれている免疫グロブリンで最も多いのはどれか。
第108回 午前 17	改善問題	心音の聴取でⅠ音がⅡ音より大きく聴取されるのはどれか。ただし、●は聴取部位を示す。
第108回 午後 1	良問	日本における平成28年（2016年）の総人口に占める老年人口の割合で最も近いのはどれか。
第108回 午後 14	改善問題	浮腫の原因となるのはどれか。
第108回 午後 18	良問	成人のグリセリン浣腸で肛門に挿入するチューブの深さはどれか。
第108回 午後 20	改善問題	転倒・転落の危険性が高い成人の入院患者に看護師が行う対応で正しいのはどれか。
第108回 午後 25	良問	腎機能を示す血液検査項目はどれか。

良問と判断された問題は 108 問（77.7%）であるが、そのうち、難易度等、問題に対して何らかのコメントが記載された問題が 21 問（15.1%）含まれていた。改善問題は 31 問（22.3%）であった。

出題の意図の適切性については、良問と判断された問題は 108 問がすべて明確であると判断されたが、改善問題では曖昧と判断された問題が 1 問（3.2%）存在した。

難易度に関して、良問と判断された問題については、106 問（98.1%）が適切、2 問（1.9%）が不適切とされた。不適切と判断された問題の内訳は、「難しすぎる（高度な知識が必要である）」が 1 問（50%）、「難しすぎる（その他）」が 1 問（50%）であった。改善については、11 問（35.5%）が適切、20 問（64.5%）が不適切とされた。不適切と判断された問題の内訳は、「簡単すぎる」が 12 問（60%）、「難しすぎる（高度な知識が必要である）」が 4 問（20%）、「難しすぎる（問題文が難解で理解が難しい）」が 2 問（10%）、「難しすぎる（その他）」が 2 問（10%）であった。

②　問題分析の結果

必修問題 139 問の分析結果を表 2 に示す。

表2 問題分析の結果

分析対象問題数合計＝139

問題数	数	（%）
a:良問	87	62.6
a´:良問だが難易度など問題に何らかのコメントあり	21	15.1
b:改善により良問となりうる問題	31	22.3
合計	139	100.0

タキソノミー	a:良問 数	a:良問 （%）	b:改善問題 数	b:改善問題 （%）	合計 数	合計 （%）
Ⅰ	108	77.7	31	22.3	139	100.0
Ⅰ'						
Ⅱ						
Ⅲ						

出題の意図は適切か	a:良問 数	a:良問 （%）	b:改善問題 数	b:改善問題 （%）	合計 数	合計 （%）
明確	108	100.0	30	96.8	138	99.3
曖昧	0		1	3.2	1	0.7
合計	108	100.0	31	100.0	139	100.0

難易度は適切か	a:良問 数	a:良問 （%）	b:改善問題 数	b:改善問題 （%）	合計 数	合計 （%）
適切	106	98.1	11	35.5	117	84.2
不適切	2	1.9	20	64.5	22	15.8
簡単すぎる	0		12		12	
難しすぎる（高度な知識が必要である）	1		4		5	
難しすぎる（設問文が難解で理解が難しい）	0		2		2	
難しすぎる（その他）	1		2		3	
合計	108	100.0	31	100.0	139	100.0

※改善問題＝改善により良問となりうる問題

③　正答肢に関する評価の概要

正答肢に関する評価を表 3 に示す。

表3 正答肢に関する評価

正答肢数（139個）

正答肢を選ぶために必要な基礎的知識の根拠は以下のいずれにあたるか	数	（%）
①事実（解剖・病態生理学、薬理学）	349	61.7
②研究的に確かめられたエビデンスがある知識	42	7.4
③②ではないが、広く認められた理論であり、教科書に記載されている	31	5.5
④②ではないが手順等として教科書に記載されている。（慣習・経験的知識）	60	10.6
⑤法令や制度、綱領として成文化されている。（慣習・経験的知識）	80	14.1
⑥①～⑤には当たらない患者の希望・心理・倫理に関する知識	4	0.7
総数	566	100.0

難易度は適切か	数	（%）
適切	123	88.5
不適切	16	11.5
簡単すぎる	10	
難しすぎる（高度な知識が必要である）	5	
難しすぎる（設問文が難解で理解が難しい）	1	
総数	139	100.0

正答肢が出題の意図における基礎的知識そのものになっていないか	数	（%）
なっていない（適切）	109	78.4
なっている（不適切）	30	21.6
総数	139	100.0

正答肢は基礎的知識がなくても選択できるようになっていないか	数	（%）
なっていない（適切）	129	92.8
なっている（不適切）-語尾だけで分かる	3	2.2
なっている（不適切）-病名だけで分かる	0	0.0
なっている（不適切）-その他	7	5.0
総数	139	100.0

※正答肢を選ぶために必要な基礎知識の根拠については、複数回答あり

正答肢を選ぶために必要な基礎的知識の根拠については、「事実（解剖学、病態生理学、薬理学）」と判断されたものが 349（61.7%）と最も多く、次いで「法令や精度、綱領として成文化されている（慣習・経験的知識）」が 80（14.1%）であった。

難易度については、適切と判断された選択肢が 123 肢（88.5%）、不適切と判断された選択肢が 16 肢（11.5%）であった。不適切と判断された選択肢の内訳は、「簡単すぎる」が 10 肢（62.5%）、「難しすぎる（高度な知識が必要である）」が 5 肢（31.3%）、「難しすぎる（設問文が難解で理解が難しい）」が 1 肢（6.3%）であった。

正答肢が出題の意図における基礎的知識そのものになっていないかという点では、「なっていない（適切）」が 109 肢（78.4%）、「なっている（不適切）」が 30 肢（21.8%）であった。

正答肢は基礎的知識がなくても選択できるようになっていないかという点では、「なっていない（適切）」が 129 肢（92.8%）、「なっている（不適切）-語尾だけで分かる」が 3 肢（2.2%）、「なっている（不適切）-その他」が 7 肢（5.0%）であった。

④ 誤答肢に関する評価の概要

誤答肢に関する評価を表４に示す。

139 問のうち、4 肢択一が 133 問であり、5 肢択一が 6 問であった。そのため、誤答肢は全部で 423 肢であった。

誤答肢を選ぶために必要な基礎的知識の根拠については、「事実（解剖学、病態生理学、薬理学）」と判断されたものが 1066（62.3%）と最も多く、次いで「法令や精度、綱領として成文化されている（慣習・経験的知識）」が 234（13.7%）であった。

出題の意図との一貫性については、「適切（一貫している）」が 423 肢（100%）であり、「不適切（一貫していない）」はなかった。

難易度については、適切と判断された選択肢が 378 肢（92.7%）、不適切と判断された選択肢が 45 肢（10.6%）であった。不適切と判断された選択肢の内訳は、「簡単すぎる」が 29 肢（6.9%）、「難しすぎる（高度な知識が必要である）」が 10 肢（2.4%）、「難しすぎる（設問文が難解で理解が難しい）」が 6 肢（1.4%）であった。

誤答肢は基礎的知識がなくても選択できるようになっていないかという点では、「なっていない（適切）」が 392 肢（92.7%）、「なっている（不適切）-語尾だけで分かる」が 7 肢（1.7%）、「なっている（不適切）-その他」が 24 肢（5.7%）であった。

表4 誤答肢に関する評価

		誤答肢数（423個）	
誤答を除くために必要な基礎的知識の根拠は以下のいずれにあたるか		数	（%）
①事実(解剖・病態生理学、薬理学)		1066	62.3
②研究的に確かめられたエビデンスがある知識		131	7.7
③②ではないが、広く認められた理論であり、教科書に記載されている		89	5.2
④②ではないが手順等として教科書に記載されている。(慣習・経験的知識)		180	10.5
⑤法令や制度、綱領として成文化されている。(慣習・経験的知識)		234	13.7
⑥①～⑤には当たらない患者の希望・心理・倫理に関する知識		12	0.7
	総数	1712	100.1
出題の意図と一貫しているか		数	（%）
適切(一貫している)		423	100.0
不適切(一貫していない)		0	0.0
	総数	423	100.0
難易度は適切か		数	（%）
適切		378	89.4
不適切		45	10.6
簡単すぎる		29	6.9
難しすぎる(高度な知識が必要である)		10	2.4
難しすぎる(設問文が難解で理解が難しい)		6	1.4
	総数	423	100.0
誤答肢は基礎的知識がなくても選択できるようになっていないか		数	（%）
なっていない(適切)		392	92.7
なっている(不適切)-語尾だけで分かる		7	1.7
なっている(不適切)-病名だけで分かる		0	0.0
なっている(不適切)-その他		24	5.7
	総数	423	100.1

※誤答を除くために必要な基礎知識の根拠については、複数回答あり
※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない

２）フォーカスグループインタビュー

フォーカスグループインタビューの結果を表５に示す。以下、インタビュー項目にそって整理した。

①出題の意図は明確か

出題の意図が明確でないという問題が 24 問中 8 問あり、改善問題に多かった。出題者は一般論で出題していると思われるが、条件によって正答が変わるような問題は「改善問題」と判断されていた。また、単純に長さなどを問う問題もそれを問うことの意義がわからないということで、「改善問題」と判断されていた。

②難易度は適切か

難易度について、簡単であるが適切であるという意見が多かったが、簡単すぎるという問題が 4 問あった。一方、簡単ではあるが受験生によっては難しいという意見も出された。難しいあるいは問題を読み解くのに時間がかかるという問題が 3 問あった。

③正答肢を選ぶ，あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か

根拠については明確であるという意見が多く、教科書等で記載されており、記憶しておけば解答できるとするものが多かった。一方で、程度によっては正答となり得る選択肢が含まれているなど、改善が必要な点が指摘された。

④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか

臨床において必要な知識を問う問題でないとされた問題が 4 問あった。たとえば、睡眠を促す目的で足浴を実施することがほとんど見られなくなっていることや、氷枕そのものが使われることがなくなっていることなどが挙げられた。

⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか

看護基礎教育の教授内容から逸脱した問題とされた問題はなかったが、出題の仕方を検討した方がよいという意見はだされた。

⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか

改善問題については、設問文の表現を修正した方がよいという意見が多かった。また、出題の意図そのものを見直した方がよいという意見もあった。選択肢を見直した方がよいという問題もあったが、具体的な修正案を出すことは難しかった。

⑦その他

研究班が良問として抽出した問題であっても、インタビューでは改善点が指摘された問題が 4 問あり、参加者によって評価が異なる問題が 1 問あった。逆に研究班が改善問題として抽出した問題であっても、改善点が出されなかった問題が 3 問あった。

必修問題全体について、「難易度を上げる必要はなく、理解をしていないといけない最低限の内容でよい」、「臨床で活用されており、エビデンスがはっきりしている内容が求められる」、「臨床での判断に必要な知識が求められる」といった意見が出された。また、必修問題は同じような出題が多くなることについて、必要な内容であれば、既出問題と同じでもよいのではないかという意見もあった。

４．考察

「良問」については、出題の意図が明確であり、臨床において必要な知識を問うもので、看護基礎教育の教授内容から逸脱していないという条件が揃っていた。「改善問題」については、出題の意図においていくつかの解釈ができるため曖昧であったり、教員からすれば意図は理解できるが、受験生にとっては何を問われているのか読み解くのに時間がかかったりする問題が多かった。また、出題の意図は明確であるが、現在の臨床ではほとんど使われていないという内容に対する出題についても意見がだされた。特に器具や機器などは変化していること、在院日数の短縮などでケアの状況が変化していること等を考慮して出題を考えていく必要がある。

必修問題の場合にはタキソノミーＩの出題になるため、記憶を想起する出題になることが想定される。その際に、そのことを覚えておくことがなぜ必要なのか、看護においてどのような意味があるのかを問うことが、「良問」であるか「改善問題」であるかの差になることが考えられた。

５．結論と今後への提言

必修問題では以下の条件を考慮して問題を作成することが重要である。

- 出題の意図が明確で、問われている内容について多様な解釈を許さない。
- 臨床において必要な知識を問うものであり、実際に活用可能な内容を扱っている。
- 看護基礎教育のどの教育機関でも教授している内容である。

表5. フォーカスグループインタビュー結果

設問					必修問題・状況設定問題共通					
No	第○回	午前午後	問題番号	「良問」「改善問題」の別	①出題の意図は明確か	②難易度は適切か	③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か	④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか	⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか	⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか
1	看護師106	午前	6	良問	乳児の発育状況の知識の理解という点で明確である。	簡単であるが、必要最低限、押さえておかなければならない内容である。 基本的な知識として必要ではあるが、覚えておけば応えられるので、簡単すぎるかもしれない。	覚えておけば回答できるため、根拠は明確である。	成長発達の知識は臨床に出たときの基本的な内容で必要である。	逸脱していない。乳幼児の成長発達の正常を知るというところでは教授している。 准看護師科の准看護師資格試験でも出題されている。	特に改善の必要はない。
2	看護師106	午前	12	改善問題	出血部位という表現で出題の意図として何を求めているのかがわかりにくい。 ・吐血と喀血の違いを問うのか、何の知識を問うのか不明。定義を問うのか、病態を問うのか明確ではない。	言葉の定義とその部位を知っていれば解けるので簡単である。	言葉の定義とその部位を知っていれば解けるので根拠は明確である。	事象を見たときに正しく何が起きているかを判断し、記録していくために必要な知識である。 病態を推測して、その後の方向性を判断するために必要な知識である。 喀血で出血部位というのは、臨床で問うことが必要な問題かは疑問である。	喀血は病理学で習っている。単純に喀血、どこで起こるのかという病態か、この出血部位だけを問う問題であれば適切な問題である。 病態としては習っているが、症状別看護の事例展開はしていない。	病態的なものを問うのであれば、何が起きているのかを問う方が適切である。 その出血では緊急性が高いのかなどを問うのでもよいのではないか。 選択肢を改善したほうがよい。気道は、解剖学としては外鼻孔や鼻腔・咽頭も含めて気道と呼ぶので、選択肢として妥当なのか。出血を連想させる選択肢で考えさせる問題のほうが良いので、脳や胆道という選択肢ではなく、出血といった事象を判断する選択肢にしたほうがいい。出血の起こり得る可能性が高い選択肢の方がよい。
3	看護師106	午前	19	改善問題	足浴の効果で「最も」と問われると、人によっては食欲増進にもなってくるので意図が曖昧だと思う。	簡単である。 2が正答であると思うが、血流促進、副交感神経の関係により、1も当てはまるように思う。 受験生には読み解き方に迷う可能性がある。	4つの選択肢の中で「最も」ということを問うているが、食欲増進という効果もありますので、根拠は明確でない。	睡眠を促す援助としての実施はほとんど行われていない現状である。時代に即してないんじゃないかという意見はある。 臨床では正答の目的として行われていないことを問うことへの疑問の意見もあった半面、行っていないから知らなくていいということはないだろうという意見もある。 臨床では、睡眠のためにするということよりは対象のリラクゼーションとかいうところのほうが大きいので、必要な知識という点では違うように思う。	清潔の援助として、静水圧の影響を受けない入浴法として教えている。 実習では、主に清潔を保つこと、リラクゼーションというケア目的で学生は実施している。 教授内容では必ず押さえるので、そういう意味では学生が理解しやすい。	温浴による皮膚温の上昇とか、放散による深部体温の低下ですといった睡眠のメカニズムを問う問題として足浴を出す。 選択肢で足浴の効果として期待されないものを、例えば食欲の低下とかを挙げる。 眠れない患者さんにはどんな効果があるかなど、事例を基に問うてもよい。 問題の意図をもう一度考え直して、。睡眠の導入が効果的な理由についての問題とか、選択肢のほうが良い。
4	看護師106	午前	20	改善問題	出題の意図は明確である。 あえて「療養施設、社会福祉施設等が集合している地域」と出しているので、なぜ地域を出しているのかというのは曖昧だ思う。外のことを言っているのか、施設内でのデシベルのことを問うているのかで、出題の意図は明確ではない。 必修問題として知識の習得を求めるのか、意図には疑問がある。	簡単である。 教員からすると難しくないと感じるが、答えている学生には、法律の知識の定着はなかなかできていないと感じる。	法律で定められていることなので根拠は明確。	環境の中での騒音は大事だが、法律でデシベルかというところを正確に覚えていることが必要なのか疑問がある。 臨床において〈療養している方に音は影響があるので必要な知識であるが、50dBの値までを本当に必要なのか疑問。 母性の教員からは、NICUの騒音に関してはデシベルで示しているので、デシベルという概念はやはり知っていてほしいという意見があった。 今後、地域在宅の医療の場で環境をアセスメントするときに、環境基本法によって制限されているという知識はあっても良い。 騒音の指標として50dBというのがどのぐらいの音なのかをわからなければ、あまり臨床では意味はない。 臨床では活用しにくい。	基礎看護学の「環境」で、デシベルを示して、測定することをしている。授業で環境基本法という言葉を示している。 基礎看護学では触れていないと思う。臨床現場で常に騒音計を持ち歩いて測定しているわけではないので、出題の仕方を検討する必要がある。	法律として定められている基準を覚えておいたほうがいいのかという疑問。環境音を判断するときの基準としてデシベルということはあるということは、そのデシベルがどれぐらいの音なのかというのを知っておくことは必要である。 必修問題で必ず知っておいてほしい知識なのかというところは、そこまでではないと思う。 会話や足音など、音についてどんなことが問題となるのかを具体的に問う問題がいいのではないかと考える。そうすると必修問題というよりは、状況設定問題になってくるかもしれない。 看護援助につなげられる問題だとよい。療養の中で患者が不快となる音はどれかのような問題を考えた。

表5. つづき

設問					必修問題・状況設定問題共通					
No	第○回	午前 午後	問題 番号	「良問」「改善問題」の別	①出題の意図は明確か	②難易度は適切か	③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か	④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか	⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか	⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか
5	看護師106	午前	23	良問	気管内の一時的吸引という出題は意図的にはわかりやすい。安全な吸引圧というところで出題の意図は明確である。	適切である。覚えてしまえば簡単である。	口腔内・気管内吸引の吸引圧は必ず押さえる内容であり、根拠は明確である。	安全に吸引するには必ず押さえなければならない内容である。	口腔内・気管内吸引というところの吸引圧というのは必ず押さえる内容である。 演習でも行っているので知識も定着しやすい。	単位がパスカルで示す器械も今は多いと思うので、単位に関しては一応検討が必要かと思う。准看護師の資格取得試験でも同じ問題が出ているが、そこでは両方示していた。
6	看護師106	午後	6	改善問題	母体内の環境適応の知識を問う問題という点で出題の意図は明確である。	難易度としても簡単で適切である。 必修としては難易度は高いと考えたが、母性看護学教員からは必修の問題であるという意見があった。	解剖学で習っている内容であり、根拠は明確である。 テキストで太文字で記載されており、要点である。	肺表面活性剤の有無で児の成長にはかなり影響するものであり、母子においては必修で押さえておく必要がある。 児がNICUに入るか入らないかの指標の1つである。 人が生きる上で必須である呼吸のメカニズムと、胎児期の身体の拡張機能、感染の過程の知識は必須である。 臨床においても肺の機能が定着していないという指標は大事である。 34週前で産まれるのか、その以降に産まれるのかではその後の挿管の基準にもなる。それを知った上でのように看護するのかの判断基準としては大事な問題である。 アセスメントの情報として必須である。	解剖学で習っている内容である。	特に改善の必要はない。
7	看護師106	午後	8	改善問題	代謝量の多い時期を問う意図がわからないという意見があった。一般常識すぎて問われる意味がわからない。この問題そのものの妥当性に疑問を持つ。あまりにもわかりやすい、看護ではなくてもできたのではないかというところで、あまりにも明確で、何をここで求めているのか逆にわかりにくい。	簡単である。 サービス問題のような印象である。	根拠は明確である。	代謝量の変化は知らなければいけない知識であり、知っているという前提の上で学習が始まっている基本的な知識。	基礎代謝量という言葉は、成人でも栄養学でも基礎の栄養状態のアセスメントでも言葉として出てくる。 教授内容では確実に押さえている。基礎代謝量を問う問題としては適切だが、この知識をどう結び付けるかが問われる。	変えるとすればという意見はあまりなかった。 選択肢に対しての疑問はあった。選択肢は向老期と老年期とあるが、あえてここを分けた意味は何かと疑問が出た。 設問を変えようとすると難しい。選択肢4つを挙げなければいけないが、変えることができなかった。 正直解決策が出てこない。基礎代謝量について、栄養の問題なのか、成人保健活動につなげていくのか、代謝量だけを問うていくのかなど、設問によっては難しい。 個人差があることと情報過多の時代で思い込みが生じる可能性があるので「一般的には」や「○○の基準によると」という記述が必要だと考える。
8	看護師106	午後	10	改善問題	明確であるが、病床数300床以上の設置基準を問いたいのか、感染制御チームの活動を問いたいのか不明。	適切である。 やや簡単である。 消去法で導けられると思う。 感染制御チームについて、大学病院など大規模病院で実習している学生と、比較的小規模な病院で実習している学生では、難易度として異なってくると思う。	根拠は明確である。	実習でICTのナースから、実習での注意点とともに、その役割を説明しており、感染制御チームの役割などは臨床にとっては必要な知識。	果たして300床以上というところを教えているかと言われると教えてないかと思う。ただ、感染制御チームがどういう役割をするなどは教えている。 科目で言うとチーム医療と看護などがあり、統合実習のときにICTなども入っているので、イメージはつく。	300床以上はなくてもいいのではないかと思う。

表5. つづき

設問					必修問題・状況設定問題共通					
No	第○回	午前 午後	問題 番号	「良問」「改善問題」の別	①出題の意図は明確か	②難易度は適切か	③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か	④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか	⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか	⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか
9	看護師106	午後	23	改善問題	明確である。	難易度は簡単すぎる。	根拠は教科書などに記載されている。	氷枕は臨床ではもう使ってないので、あえて問う必要があるのかと思う。 臨床で実際に患者さんにケアをするときに使っていけるかということを問うほうが、必修でも妥当かと思う。 氷自体がクラッシュアイスであることもあり、病棟でも実際見ることはあるので、作り方は出題しなくてもよいのではないかと思う。	氷枕の作り方などは演習の中で取り入れている。 演習では確かに教えるが、昔に比べると電法に割いている時間数は、あまり時間をかけなくなってきている。 教えるときに技術を教えているわけではなくて、患者へのケアにどれくらい還元するかという点を強調している。	氷枕の作り方だけに限局する必要があるのか疑問なので、例えば電法など、もう少し広い範囲で選択する問題の方がよい。 氷枕ではなく、クーリングでの出題でもよい。 基礎技術というより、危険性を察知して、それを取り除くといった安全確保の問題の方が学生にとっては臨床に行ったときの知識としての必要性は高くなると思う。 方法論だけではなく、熱伝導など、根拠を問う選択肢になるような出題になるとよい。他にも患者の快・不快などを問う出題になるとよい。
10	看護師107	午前	3	良問	意図は明確である。 この文章を読んで、何を聞かれているのかに迷うことはない。	難易度的には易しいほうではないか。易し過ぎるということはない。 簡単だと思うが、簡単すぎることはない。	一般的にも社会的にもシックハウス症候群はよくメディアで取り上げられているし、医療職、看護職としても知っている必要のある現代病である。	病棟で働く看護職には、シックハウス症候群の患者さんに関わる機会は少ないと思うが、これから在宅看護に移行していくと、こういった知識は必要になってくる機会が増えていくと思う。 臨床で出会うかどうかというよりも、常識的な範囲でわかっている内容と思う。看護職としては常識的という意味であり、一般の人にとって常識的という意味ではない。アスベストやダイオキシンなどは、ニュースを見ていても出てくる言葉だと思う。	特に保健師課程を取らない人でも、公衆衛生的な視点は看護職にとっては欠かせない。 放射線セシウムもアスベストもダイオキシンもシックハウス症候群ではないが、別の健康被害に関するものなので、きちんと学習していれば混同せずに解答はできると思う。	出題自体は改善すべきところはない。選択肢としても適切である。
11	看護師107	午前	13	改善問題	極めて明確だと思う。 出題の意図を酌み取るのに少し時間がかかると思った。最初に4番を選びがちだと思い、もう一度設問を読み直して度考えて解答に至ると思う。	私たちにしてみたら難しくはないが、問題文の読み込みをしっかりしないと、感覚障害というワードだけで別の選択肢を選んでしまうかもしれないと思った。少し難しいかもしれないが、重要な問題と思う。 出題の意図を読み取るのに時間がかかるので、比較的難しいと解釈した。「限局して」という表現の意味を理解するのが難しいと思った。	神経走行のことを、解剖生理、解剖学的な知識をしっかり持っていることと、それが看護にも関係してくると思う。	臨床には非常に密接に関係するものであると思う。 確かな知識として持っている必要があるのかと少し疑問に思った。	非常に適切である。感覚障害の原因もいろいろあるが、発症メカニズムの違いなどは、解剖生理学、疾病論、急性期看護で必要になってくるので、基礎教育で教授している内容とは非常にマッチしている。 解答が物理的圧迫で、それに関する項目は必要なところで教えているが、学生たちにとっては注目度は低い内容かと思う。	「周辺に限局して」という表現の内容を読むことが少し難しいと思う。表面的な学習だけだと他の選択肢を選びやすく、学習しているかどうかがはっきりわかる問題だと思う。 限局して起こる感覚障害の原因になるのはどれかとか、選択肢の文が異質に見えるので、一時的に痺れたりするような軽度のものから、正中神経の圧迫のようなものなど、選択肢の内容を修正するとまだわかりやすいと思う。病気の関連として学生の頭の中には想起ができるのではないかと思う。 改善する必要は思い当たらず、非常にいい問題だと思う。
12	看護師107	午前	16	改善問題	意図は明確である。 看護技術などでも浣腸の技術は行うし、排便を整えるということは看護の基礎となる大事なことだと思うので、意図は明確と思う。	簡単である。浣腸にもさまざまな目的があることなどはわかってなくても解けると思った。 少し簡単すぎると思う。その理由として浣腸液というと今グリセリン浣腸が製剤となっているので、すぐにイメージできると思った。	知識だけではなくて、看護技術としても取り上げているものだと思うので、実体験も伴っている。	必要な知識である。病院以外にも地域に出ても訪問看護でも実施する機会もあるし、保健師になったとしても排便のコントロールで指導に関わる場面が多いと思うので、ぜひ看護職には持っていてもらいたい知識である。	いろいろな教科書に書いてあり、看護技術の授業や実習でも機会があると思うので、学校での教授内容とはマッチしている。適切な内容である。 基礎看護学で浣腸液は出てくる内容であり、関連している。	エタノールを選択するということは、体内にエタノールを入れるというリスクをわかっていないということになるので、絶対に患者の命に関わるような健康に害を及ぼしてしまう選択肢があるのはいいことだと思う。 問題文を改善ということはあまり考えなかったが、ただ選択肢の「ヒマシ油」はおそらく知らないと思う。40代の教員もこれは知らないと話した。誤答になる率というのは低いと思う。おそらく教えてもいないと思う。魅惑肢にはなってないと思う。

表5. つづき

設問					必修問題・状況設定問題共通					
No	第○回	午前午後	問題番号	「良問」「改善問題」の別	①出題の意図は明確か	②難易度は適切か	③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か	④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか	⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか	⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか
13	看護師107	午前	17	良問	麻薬及び向精神薬に関する法律のことというのははっきりわかるので、意図が明確である。	難易度としては適切である。学生は薬にあまり馴染みのなく、多くの薬剤には関わってないと思うが、教科書にはフェンタニル等がよく出てくるし、きちんと学習すれば解ける。逆に学習していないと、聞いたことのある薬剤を選んでしまうので。 難易度としては難しくはないと思う。選択肢はよく見る薬品であり、その中で薬品の管理で重要なものを知っているということは大事だと思う。	麻薬及び向精神薬に関する法律のことと、この中でどれが向精神薬や麻薬などに当たるかという知識と合致していないと答えられない問題である。	臨床的に4つの薬剤ともによく見るもので、この知識を持っていることは、1年目の新人ナースとしても必須の知識と思う。臨床的にも非常に身近な問題だと思う。 必要な知識だと思う。薬品の管理、特に麻薬の管理は日常的に扱う作業の中に入ってくるので。	薬理学で教授しているし、がん看護学のような科目や、緩和ケアなどでも扱っていると思うので、教授内容とは合っていて適切だと思う。 学校では必ず教えている内容であり、適切だと思う。	特に改善することはないと思う。一般名で記載されているし、このままでいいと思う。
14	看護師107	午前	19	改善問題	意図は明確である。異常呼吸音の分類ということで、明確に出題されている。	基本的なことだが、必修問題としては適切な難易度である。	「水泡音」という名称だけでなく、「ストローで水に空気を吹き込むような音」の両方が記載されているので、よいと思う。	呼吸音の聴診は臨床で看護師がよく実施することなので、この知識は持っている必要があると思う。臨床で非常に重要な知識だと思う。 臨床の中で使う知識である。特に分類の仕方は統一されたので、知識として持っていて、観察して、表現も統一することが必要である。	高調性連続性副雑音という言葉が標準的な言葉であるが、標準的な用語と音の性質を結び付けて学習できているかは、基礎教育でも大事なところであり、教授内容と合っている。 呼吸音のフィジカルアセスメントが浸透する前は、呼吸音の表現が曖昧であったが、基本的には出題された4つであり、これを知識として持っておく必要はある。 基礎教育でフィジカルアセスメントの授業では名称だけで教えていて、あまり詳しくは説明していない。	改善はなくてもよい。 名前だけ覚えていてもいけないし、性状だけしかわかっていないというだけでもいけないので。こういった問題が出されていると、学習の方向性として受験生にとっても非常に有益である。 類解は、漢字だけでは難しい学生も多いと思うので、いびきのような音と書いてあるほうが選択肢として意味が伝わりやすいと思う。外国人の方も受験するので、漢字だけではなかなか難しいという感じはする。
15	看護師107	午前	21	改善問題	意図は明確でわかりやすいと思う。	難易度は中程度。解答は下痢だが、咳嗽を間違って付ける受験生もいるかと思った。少し迷いやすいというか、誤嚥性肺炎などと勘違いして間違えやすいかと思う。有害事象がわかっていれば解答できる。咳嗽という意味では、経鼻経管栄養剤と誤解することもある。 難易度は易しい。経腸栄養は、高齢者の実習で学生が出会っているケースではないかと思うので、知っていることが多い。	国家試験でも有害事象という言葉を使っていて、薬理学の教科書にも有害事象と出てくる。経腸栄養剤で何が起こるかということは非常に看護に身近なことである。	これは臨床でも起きやすいものなので、臨床と密接に関係していると思う。 臨床で必要な知識と思う。	経腸栄養剤、経腸栄養法を実施している患者の看護では、必ず下痢や揉便の状況が出てくるので、教授内容と照らし合わせても適切と思う。	脱毛という選択肢が少し突飛かと思ったが、修正案は難しい。正解肢を作るのは簡単だが、間違った選択肢を作るのは難しい。 脱毛という解答肢はナンセンスまでは思わないが、ほかに確実に間違いだというものを作るのは難しい。別の魅惑肢になるものがあるといいと思う。 改善する必要はない。脱毛は少し異質と思ってはいたが、有害事象、副作用で混乱させる意味だと思った。ただし、少し違和感を感じたのは確かである。
16	看護師107	午後	10	良問	意図は明確だと思う。関節の運動の名称は看護職としてもきちんと理解して使えるようになってほしいと思う。 出題の意図はわかりやすいと思う。	難易度は適切である。きちんと学習していれば決して難しくはないが、学習していないとできないと思うので。 難易度は少し難しいと思った。図がもう少しわかりやすいといい。	教科書にもよく出るところで、運動器疾患を持つ患者の看護で大事である。	運動器疾患がなくてもリハビリテーション看護の基礎になってくるので、臨床に行くに当たってはこの知識は必要だと思う。臨床では使う知識である。	教科書にもよく出るところで、運動器疾患を持つ患者の看護で大事である。授業、実習、演習でやるところだと思う。 教えている内容と適合性はあると思う。ただし、股関節の運動やリハビリなど、高齢者のところが多くなってきているので、手術の後の内転をさせないことの意味、関節の可動域、動かし方の意味がわかっていないといけない知識である。 内転のところが重要だと思う。	図は非常にわかりやすい。股関節は特にいろいろな運動の方向があるので、良い問題と思う。関節の動きがよくわかる図だと思う。 図がわかりにくい。フィジカルアセスメントのテキストを見ると、もう少し体のフォーム全体を書いていることが多かったりすると思う。下肢だけが挙がっているとかえってわかりにくい気がした。写真で示されていることが多いと思った。

表5. つづき

設問					必修問題・状況設定問題共通					
No	第○回	午前午後	問題番号	「良問」「改善問題」の別	①出題の意図は明確か	②難易度は適切か	③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か	④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか	⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか	⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか
17	看護師107	午後	16	改善問題	出題の意図は明確だと思う。正答率を見たらなぜ低かったのかと思った。 出題の意図はすぐわかったが、学生にはわかりにくかったようである。	難易度としては悩ましい。まだ臨床に出る前で受験生にはインドメタシンがわからないのかもしれない。逆にNSAIDsの方がわかるのかと思ったが、その方が逆に難しくなり過ぎるようにも思う。禁忌がわからないのだと困る。 難しい。インドメタシンという表現について、薬の名前を理解しているかどうかによって、正答率が異なってくる。	鎮痛解熱剤という解釈で、学習はできていると思う。逆に知識としてきちんと整理させていないと解答できない。禁忌という言葉については、理解できているようである。 非ステロイド性の炎症薬という書き方などがあり、その分類と罹患名などが整理されて知識として定着していないと解答できない。学生に「インドメタシン」を聞いたときにあまりピンと来てなかったことがあったので。	インドメタシンは内服薬以外にもよく使われるものであり、臨床ではよくある知識である。看護師には観察が必要なものであり、密接であり。頻繁に出会う確率の高い薬である。	インドメタシンという名称では臨床薬理学で教科書にも載っており教授内容とは合っていると思う。ただし、それは受験生が覚えるべきことを覚えているかで分かれると思う。 薬理学、疼痛コントロールなどで学ぶし、臨床でも出会う薬である。	消化性潰瘍以外、選択はできないと思う。逆にどの選択肢を選んだのかを聞きたいぐらいである。インドメタシンという薬剤を知っているか、NSAIDsにはどんな一般名の薬剤があるのかを押さえられているかということなので、問題の改善というよりは学習者側の問題や教育する側の工夫だと思う。 改善は難しいと思った。非ステロイド性とすると、トータルな意味になるのであまりよくないと思ったので、問題文を変えるのは難しい。知識として整理させたほうがいいと思った。
18	看護師108	午前	8	良問	明確である。	簡単だが、妥当だと思う。 母性看護学としては妥当な問題だと思う。	基本的なことである。 過去問にも出ている。	ミルクではなく母乳を勧める理由として、大事な成分が含まれているということで、必要である。	絶対覚えておいてほしい内容で、必要である。教育機関での教授内容として、必要である。	改善は必要ないのかもしれない。 改善するために変えるのは難しい。 母乳という制限があれば変えることは難しい。胎盤通過性になれば、IgGになるなど、そこでの識別を問う問題もあると思うが、出題の意図が変わるので難しい。
19	看護師108	午前	17	改善問題	I音と言うのであればI音は決定だが、I音がII音より大きく聴取されるという問いが、頭を働かせるような出題になっている。 必修なので、心拡大などはなく健康な人というところで捉えるという点では明確だと思った。 部位を確認したいという問題の意図はわかったが、出題の意図をすぐに把握することが難しい。	妥当という意見が多かった。	部位がどこかを問う問題であればそのままの方がよい。臨床で心音の聴取は使うと思うが、I音よりII音が大きく聴取されるということで聞くことはない。	臨床的に心拡大があり場合、心音の聴取は非常に難しい。 臨床で心音の聴取は使うと思うが、I音よりII音が大きく聴取されるということで聞くことはない。	教授内容では基礎看護学、フィジカル、病態病理でも教えると思う。 聴診の部位として、解剖のいわゆる肋間をきちんと触ること、聴診器を当てる位置をフィジカルアセスメントで教えている。どちらに向かって血流が流れていくから聞きやすいということも教えている。	音の聴取の大きさの部位を覚えているかを問うのであれば、もう少し違う出し方がいいと思った。 よく教科書に載っているように色で領域分けされているような感じの問い方をして、その中から部位がどこかを問う方がオーソドックスかと思う。 今回は肋間が出ているから、やはり第5、6肋間の所だということを答えさせたいのであれば、僧帽弁、房室弁の閉鎖がどこで聞こえるのかという問題のほうがよいと思う。本当に問いたかったのは、音の大きさではないと思うので。 I音が何を意味するのか、II音が何を意味するのかということのほうが重要だと思う。 I音がII音より大きく聴取されるのはどれかというように、出題のし方を工夫すると、学生にもう少し考えさせることができると思う。 過去問の大動脈弁領域はどこかという出題と同じ意図であれば、I音からII音を聴取することより、大動脈弁領域はどこかというように簡単に聞いたほうがよい。 今フィジカルアセスメントに力を入れていて、シミュレーション教育などもいろいろされている中では、必修問題でも、僧帽弁領域とか、心尖部を聴取したい場合にはどこに聴診器を置くかという出題でもよいと思う。
20	看護師108	午後	1	良問	出題の意図は明確。 根拠として数値の知識は必要で、それを問う問題という点では明確だが、これを知ってどうするという点では疑問がある。	簡単である。	根拠は明確である。	超高齢社会になっているので、社会情勢を踏まえた上でも必ず学習しておく必要がある。 臨床において高齢者が増えている事実というのを知って看護の動向を知る上では必要である。 動向を基に施策が関連していくため、看護の展望も考えようとしている。 看護の対象として今の人口動態について、4人に1人が高齢者だという事実、人口動態を把握していくことは必要である。	公衆衛生や老年学で併せて教授している内容なので、問題としては適切。 動向を基に施策が関連していくため、看護の展望も考えようとしているので、その基となるデータ、社会保障が医療・保健・福祉に関連していくので、知識としても示して、教授内容として示している。 老年看護では基本的な知識として教えている。	必修問題でこのデータだけを問うのは妥当なのか、必ずしも問う必要はないのではないか。専門職として最低限の知識として必要かという問題とは違う。 このまま客観的データの知識を問うのではあれば全くこのままで。この問題自体を改善するという意見は出なかった。 ・動向を知るというものであれば、問題的には改善しなくてもいいのではないか。 ・明解なので、改善するという意見は出なかった。

表5. つづき

設問					必修問題・状況設定問題共通					
No	第○回	午前午後	問題番号	「良問」「改善問題」の別	①出題の意図は明確か	②難易度は適切か	③正答肢を選ぶ、あるいは誤答肢を除くために必要な知識について根拠は明確か	④設問は臨床において必要な知識を問う問題となっているか	⑤看護基礎教育の教授内容から逸脱していないか	⑥改善すべき内容と具体的にどのように改善したらよいか
21	看護師108	午後	14	改善問題	明確である。	簡単である。 解けない問題ではない。 基本知識があれば解けると思う 必修問題としては難易度として適切だと思う。	解剖的なこととか生理的な知識があれば解ける。 基本的なメカニズムであり、知らないと解けないが、知っていれば簡単である。	臨床に行くと、脱水の患者か、浮腫を持っている患者かは、大抵どの科に行ってもそれなりにいるので、必ず必要になってくる知識である。	教育内容としても適切である。 実習に行って、「何で浮腫、起こるの？」と聞いても、「え？」という学生たちはいるので、覚えておく必要がある。 学生は膠質浸透圧と血管の浸透圧とを混在して理解するので、学校で教えている内容からみても、問題としては適切である。	特に改善すべき箇所ない。
22	看護師108	午後	18	良問	問われている問題の意味はわかるが、深読みするとなぜこれを出題したのかという疑問点が残った。 何cmかということを確認したいという問題の意図はわかるが、そのことの意味が疑問である。 長さで問う必要があるかと思った。長さは必要だが、長さだけ問う意味合いはないと考える。	難しくはない。	教科書では、4～5cmだが、4～6cmと書いてあるのもある。 教科書によって結構まちまちで、教える先生によって使う教科書も異なる。 解剖の本と技術の本で違っていたりする。	浣腸の製品のどこにマークが付いているかというと、成人の場合は6と10。根拠は4～5の肛門管だということで5にしているが、現場は6である。製品がそのように売っているので。 体格によっても変わってくる。 グリセリン浣腸はいろいろな事故があり、厚生労働省でもやってはいけないことは出されている。	肛門管の長さでと教えている。 数値的なものは教科書によって差があるが、数字としてはそれで覚えなさいとしか授業では言えない。 手順とか禁忌は必ず学生たちに演習前に書かせて、確認をしてから実施する。	覚えていてもらいたいことは、体位のことやスピードなど、そのほうがグリセリンでは必要かと思う。 浣腸というと、長さと体位とスピードと温度という4つの組み合わせでどれか正解にして、は間違ったことの問題はよく作る。 やってはいけないことはどれか、気を付けなければならない点はどれかのような形にして、長さだけではなくほかの要素も入れたらよい。 もう少しグリセリン浣腸の全体的な知識を問うという形にすれば、必修でも出題できると思った。 必修なので基本的には絶対にわかっていてもらわなければいけないという問題とするのであれば、禁忌を押さえたほうがよい。 長さだけではなく、温度なども重要なので、それが問えるのであれば、そういう問題のほうが必修としては適切だと思う。
23	看護師108	午後	20	改善問題	出題の意図が少しわかりにくかった。 問われている内容としてはわかる。 「成人」と書いてある意味がわかりにくいと思った。 出題の意図が今一つわからなかった。	難易度は難しくはない。学生は考えなくてもわかると思う。ほぼ迷わないで4付けると思う。	転倒・転落ということは明確に学んでいると思う。	転倒・転落の危険性が高い人への対応なので、一般的な対応とリスクファクターを吟味した上での対応は異なっていると思う。 状況が変われば対応が変わるので何とも言えない。 言葉は転倒・転落になっているが、転落事故はあまりないので、臨床において必要かは少し疑問である。	別に成人じゃなくても、高齢者であっても小児であっても、同じだと思うので、あえて成人となっているところが疑問ではあった。 老年は教科書もかなり書いてあるが、成人で転倒・転落は実習でもあまりない。そこの判断はよくわからなかった。 医療安全に時間を割いてやっていて、転倒・転落のことについて臨床の看護師からも講義してもらっているので、全部入っている。しかし、おむつという選択肢は入ってこない。	成人となっているところは疑問であり、四択の内容はもう少し考えてもらいたい。 選択肢の内容は妥当かという点で疑問を感じた。 転倒・転落をしたことがあるという人が入院してきたときに、しなければならないことは何ですかという問いを考えた。 間違っているのはどれかという形にして、やってほしいことを選択肢で並べたほうが少し難易度は上がると思う。 選択肢のおむつについても疑問を感じた。 必修問題なので、転倒転落のリスクとして挙げられるものは何かなど、一般的なことを問う問題がよい。状況設定問題になったときに、転倒・転落を予防するための適切な援助というほうが妥当だと思う。 転倒・転落のリスクとなるものを選びなさい、違うものを選びなさいなどのほうが必修問題としては良い。 必修問題で対応を問うと状況が様々になるので、シンプルにリスクファクターでよいと思う。誤りを問うというのもよいと思う。 ここで書かれているものは基本的に転落ではなくて転倒のことなので、転落という言葉も不要である。
24	看護師108	午後	25	良問	明確である。	簡単である。	教科書で書かれている。	腎機能は臨床で必ずみなくてはいけないことで知っていてもらいたいことである。	腎機能は必ず教えている。	腎機能だとするとASTなども微妙に関係があり、絶対にこれだと言えないので、腎障害で高値を示すのはどれかという問いにすれば、クレアチニンとなるので、その問いのほうがいいと思う。